

見えないものにも 魅力がある

二 『資本論』 各国語版初版本 (中央図書館書庫)

ドイツの経済学者・哲学者、カール・マルクスが資本主義経済について論じた有名な著作です。1867年に出版されたドイツ語初版は、世界で1000部発行されました。中央大学には1978年にドイツ語、1981年に英語訳、1983年にフランス語訳の各初版が貴重書として、1996年にロシア語訳初版が準貴重書として蔵書に加わりました。英語訳初版には、彼の末娘にあたるエレノア・マルクスのサインがみられます。マルクスが翻訳の校正に関わったフランス語訳版(ラ・シャトル版)は挿絵が多く、華やかな印象です。

[写真上：フランス語訳初版、写真下：ドイツ語初版]



一 グランドピアノ (クレセントホール 9号館)

1925年ごろに製作されたと推定される、ドイツのペヒシュタイン社のピアノです。中央大学は、1947年にこのピアノを取得しました。ペヒシュタイン社は、「世界三大ピアノメーカー」の一つであり、同社のピアノは、ドビュッシーやワーグナーといった高名な音楽家たちに愛用されていました。普段はクレセントホールの舞台裏にひっそりと佇んでいますが、1920年代製のペヒシュタイン社のピアノは日本に数えるほどしかなく、たいへん貴重です。



四 日本医学の夜明け (中央図書館書庫)

『日本医学の夜明け』は、1978年6月に日本世論調査研究所から出版されました。『解体新書』『蘭学事始』などの書籍の復刻版や、それらに関連する手術器具のレプリカのセットと共に、この桐箱に収納されています。箱のサイズは、約48×22×30cm。そして資料は、「帙」という和本を包んで保存する装具に包まれていて状態はとても綺麗です。新潟県小千谷市の古道具屋にあったこれらのセットは、文学部国文学専攻の鈴木俊幸教授によって購入され、中央大学に寄贈されました。

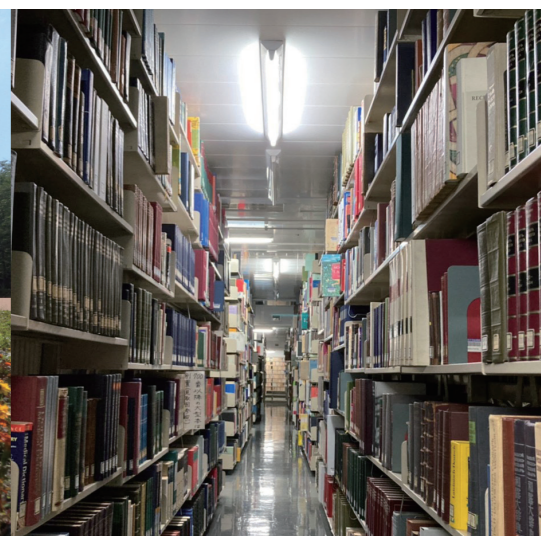


このマップは、2020年度文学部授業「特別教養(実践的教養演習)」の成果物として、中央大学教育力向上推進事業の補助を受けて制作されました。

発行：2021年2月1日 中央大学文学部事務局
制作：北見洋樹 近藤祐日 恒川真生 柏木日菜子 内田彰 楠本梨華 上久保京花

三 引札集 (中央図書館書庫)

引札とは、江戸時代から明治・大正にかけて配られた広告チラシです。現在まで残っているものは少なくたいへん貴重です。この『引札集』は、明治・大正期のチラシを中心に作成されており、スクラップブックのようなものです。元々、明治のジャーナリスト山本笑月の蔵書であり、弟の長谷川如是閑を経由し、没後、関係者より如是閑の母校である中央大学へ寄贈されました。個性豊かな引札から当時の様子がありありとかがえます。



中央大学を知ろう!

Get to know Chuo University!

中大135年の歴史を歩く

中央大学には実はいくつもの文化資源が存在します。今日は少し立ち止まり、時代と地域を越えて、多摩キャンパスで中大の歴史を遡ってみませんか。中大に関わってきた様々な人々との、意外な繋がりも発見できるかもしれません。

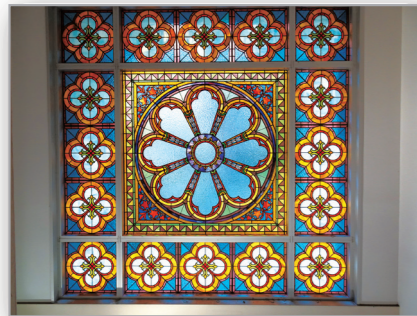


さあ、
中大をより深く知る旅へ
出発しましょう!

3 スタンドグラス (炎の塔)

3階建ての多摩学生研究棟、通称「炎の塔」。難関国家試験合格を目指す学生のための施設です。中央大学創立125周年記念事業の一環として計画され、2002年7月に竣工されました。3階にある縦・横2.57メートルもある大きなスタンドグラスは、もともと中央大学駿河台校舎の旧図書館

(1930年施工)の天窓にあったものです。駿河台校舎閉校の際に解体・保存されていたものが修復され、「炎の塔」に設置されました。このスタンドグラスに光が差し込むと鮮やかなオレンジの色調が生まれ、たいへん綺麗です。



2 テミス像 (ヒルトップ前)

ギリシャ神話の「正義の女神」として知られているテミスの像です。「テミス像」は彫刻家の堤直美氏によって制作され、全国に計5体あります。そのうち、中央大学、虎ノ門法曹ビル、津島高校(愛知県)に置かれている3体は、法学部OB千賀修一弁護士によって2006年10月に寄贈されました。右手には「衡平」を意味する天秤を掲げ、左手には「勇気と正義」を意味する剣が添えられています。

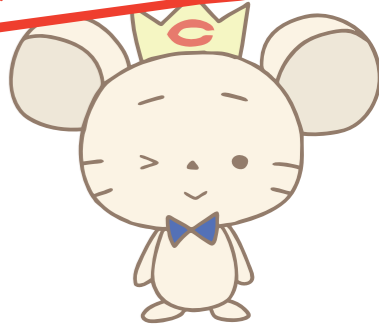


1 START! ロゼッタ・ストーンレプリカ (図書館2F・中央階段下)

18紀末にナポレオンの遠征軍がエジプトから持ち帰ったロゼッタ・ストーンの複製品です。碑文は3種類の文字で刻まれています。1980年に小原銀之助氏によって寄贈されました。仕事の傍ら日時計に魅了された小原氏は、多摩キャンパスにある日時計も制作しています。その縁でロゼッタ・ストーンの複製品も中央大学にやってくるようになりました。複製品とはいえ精巧に作られており、国内では中央大学のほかに東京大学にも所蔵されています。



中大が誇る文化資源を
その目で確かめよ!



4 イ ジェヒョン 李載滢先生像 (11号館)

モデルとなったのは、中央大学名誉博士の一人である李載滢氏。1938年に法学部を卒業後、韓国の政界で活躍しながら、韓日親善協会会長、中央大学韓国同窓会会長等も務め、日韓の交流や中大の発展に尽力されました。李氏の学生時代は、当時日本の植民地であった朝鮮や台湾出身の学生が、思想や言論を抑圧されていた時期でもありました。そういった歴史も心に留めつつ、この像を見ながら、李氏の人生に想いを馳せてみるのはいかがでしょうか。



6 錦鯉 (11号館付近の池)

学内の池を悠々と泳ぐ色鮮やかな錦鯉は、2016年のホームカミングデーに、新潟県長岡市の山古志村からやって来ました。その数は当時82匹。新潟県中越地震で被災した長岡市は錦鯉発祥の地ともいわれ、錦鯉には、平和、友好、そして復興の願いが込められています。2021年1月現在、グローバル館の4階(モノレール口すぐ)の水槽でも見ることができます。力強く頭の高い錦鯉を通じて、中央大学の更なる発展への期待が寄せられています。



8 100周年記念オブジェ (桜広場)

1985年に中央大学創立100周年を記念して建立された、学生が自由に使える屋外ステージの役割も兼ねたモニュメントです。手前に駿河台キャンパス時の校門(のちの南門)、奥に駿河台校舎南玄関口を合成した旧キャンパスを思い出させるデザインで、これらのオリジナルの建築部材もごくわずかに使用されています。多くの中大生がこれを「白門」と認識していますが、それは間違いです。確かに駿河台キャンパスに白い門はありましたが、上述のように、このオブジェはそれとは別の二つの門からデザインされています。ちなみに「白門」とは、1920年代から中央大学の同窓を意味する言葉として使われてきました。また、「白」は徽章の色に由来し、「門」は仲間や同門を意味します。



9 お稲荷さん (桜広場裏山頂上)

正式には金住稲荷といひます。超人的な力を持ち、様々な願いを成就させるといわれる、仏教の鬼神・茶積尼天が祀られています。この土地には、多摩キャンパスができる前から農業神が祀られていましたが、キャンパス造成の際、神社は一度別の土地に遷宮され、キャンパス完成後に再び校地内に遷宮されました。毎年二月には、中央大学の発展と学生の活躍を祈る初午の例祭が行われ、鳥居が奉納されています。裏山頂上までの道のりが険しいため、訪れる際は足元にお気をつけ下さい。



5 青年の像 (11号館付近)

1961年にお披露目となったこの像。制作のきっかけとなったのは1人の学生の声でした。1958年、法学部の2年生だった岡本明久氏の、「雄々しく、力強い、「中大の像」を建設しよう」という声が多く学生の反響を呼び、表現に向けた動きが盛り上がります。そしてついに、彫刻家・本郷新氏の手により、この青年像(正式名称「蒼穹」)が制作されました。像の台座には、「若人は語り合ひそして歩むのが好きだ」という文が刻まれています。皆さんにとっての若者像は、どんなものでしょうか?



7 茶室「虚白庵」(桜広場)

1996年に学員及び教職員の寄付により立礼式(椅子に座ってお茶を楽しむ方式)の茶室が建設されました。海外の研究者が中央大学を訪れた際などに国際交流を目的としてお茶会が開かれる他、学内のイベントや茶道会の練習で利用されています(入室には許可が必要です)。「虚白庵」という名は、茶道の表千家14代家元である千宗佐氏(文学部国文学専攻OB)により命名され、荘子の「虚室八白ヲ生ズ」—開け放った何も無い部屋に日の光が差し込んで明るくなるように、人は無心であれば自ずと物事の心理を悟りうる—に由来しています。

